AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2012.09) 平成21年度:112～114.

産後1ヶ月健診まで完全母乳育児を継続できない要因とそのケアに関する一考察
―母乳育児継続へのケア向上を目指して―

成田江梨香、砂原彩加、伊東美由紀、谷るみ子、森脇里美、久保治美

産後１ヶ月健診まで完全母乳育児を継続できない要因とそのケアに関する一考察
－母乳育児継続へのケア向上を目指して－

周産母子センター　４階東ナースステーション　　○成田江梨香、砂原　彩加、伊東美由紀
谷　るみ子、森脇　里美、久保　治美

はじめに

Ａ病院では、平成17年に赤ちゃんに優しい病院（Baby Friendly Hospital：BFH）の認定を受け、妊娠中から退院後まで母乳育児継続のための支援をしている。しかし、平成20年のＡ病院における完全母乳率は、退院時88.8％であるが、１ヶ月健診時は68.7％に低下している。河合らは、「混合または人工栄養に移行した理由は母親の母乳不足感である」[1]と述べており、母親が感じる母乳不足感によって混合栄養へ移行していることを明らかにしている。また、小山らは、「母乳育児は一人で行なっていくものではなく、医療者や家族など周囲者からサポートを受け、行なっていくものである」[2]と述べていることから、完全母乳育児の継続には、家族や医療者によるサポートが重要である。

そこで今回、退院後から１ヶ月健診までの母親の「母乳不足感」「母乳育児支援者」「助産師のケア」の３項目に着目して調査、考察し、今後のケアに役立てたいと考えた。

Ⅰ　研究目的

産後１ヶ月健診までに完全母乳育児を継続できない要因について明らかにし、今後の母乳育児支援のあり方を考察する。

Ⅱ　研究方法

１．研究対象

以下の条件を満たす母親74名。

１）平成21年２月１日～６月23日の期間でＡ病院にて出産した母親

２）出産当日に母児同室を開始して、完全母乳育児のままで退院した母親

３）Ａ病院で１ヶ月健診を受診した母親

２．研究期間

2009年４月末日～2009年８月末日

３．データ収集方法

対象者全員に質問紙を郵送法にて配布し、返送していただいた。質問紙は、母乳育児の継続に影響する要因についての先行研究を元に独自に作成した。質問紙は選択式と記述式であり、質問内容は、①初経産の別、②１ヶ月健診時の栄養方法、③産後１ヶ月の間のミルク追加の有無と理由、④退院後から１ヶ月健診までの授乳・生活状況、⑤退院後から１ヶ月健診までの母乳育児支援状況、⑥妊娠中から１ヶ月健診までの期間に受けた助産師によるケアである。なお、③④⑤⑥についてはリッカート法を用いた。

４．データ分析方法

対象者を母乳群と混合群に分類し、それらをSPSSにて単純集計した。また、母乳群・混合群と各質問項目とでクロス集計を行い、χ^2検定にかけ、各群間での関連性を調べた。

５．倫理的配慮

質問紙を郵送する際、封筒内に研究内容説明書・同意書・研究同意撤回書を同封した。質問紙は無記名とし、得られた回答や検定結果は個人が特定されないようにした。また、質問紙の取扱いはＡ病院内でのみ行い、研究終了後は質問紙をシュレッダーを用いて破棄した。

Ⅲ　結果

１．回答率

対象者74名のうち、回答が得られたのは42名であり、回収率は56.8％であった。また、得られた回答のうち有効回答数は38名で、有効回答率は90.4％であった。

２．対象者の属性

有効回答者のうち初産婦は16名（42.1％）、経産婦は22名（57.9％）であった。

産後１ヶ月健診時の栄養方法で、母乳のみ与えている母親（以下母乳群）は32名（84.2％）、混合栄養である母親（混合群）は６名（15.8％）であり、人工栄養のみ与えている母親はいなかった。

３．ミルクの追加を考えた理由

産後１ヶ月までの間に１度はミルクの追加を考えたことがある母親（以下ミルク考慮群）は17名（44.7％）、１度もミルクの追加を考えたことがない母親は21名（55.3％）であった。ミルクの追加を考えた理由の中で最も多かったのは、赤ちゃんがよく泣くので母乳が足りないと思った（７名）であった（表1）。

表１　ミルクの追加を考えた理由（複数回答あり）

・赤ちゃんが良く泣くので母乳が足りないと思った（７名）
・周囲の人に母乳不足ではないかと言われた（６名）
・夜眠れないため（５名）
・上の子の育児で大変だった（４名）
・赤ちゃんを誰かに預けたいと思った（４名）
・周囲の人が哺乳瓶で飲ませたいと言った（３名）
・助産師や保健師に赤ちゃんの体重増加が少ないと言われた（３名）

４．母乳不足感

母乳不足感に関する質問項目において、「そうである」「大変そうである」と答えた母親が多かったのは「赤ちゃんが抱っこをすると泣き止むのに、寝かせるとすぐに泣く」と「なんとなく母乳が足りていないのではないかと不安な時があった」が同率で多く（43.6％）、次いで「母乳を飲ませた後でも、2時間経たずにすぐに欲しがる」であった（41.4％）。母乳群と混合群において、母乳不足感に有意差はみられなかった。

５．母乳育児支援者による援助

１）相談相手

母乳育児に困った時、相談相手になってくれたか、という質問に対し、「大変そうである」「そうである」と回答した相手は実母（81.5％）であり、次いで、助産師（73.6％）、夫（65.7％）であった。 また、夫については、母乳群と混合群で有意差があった（P=0.010）（図 1）。

２）母乳育児の手伝い

周囲の人は母乳育児を手伝ってくれたか、という質問に対し、「大変そうである」「そうである」と回答した相手は実母と夫がそれぞれ 92.1％と多く、次いで義母（52.6％）、友人（39.4％）の順であった。また、夫については母乳群と混合群で有意差があった（P=0.043）（図 2）。

３）母乳不足の指摘

周囲の人に「母乳が不足しているのではないか」と言われたことはあるか、という質問に対し、「大変そうである」「そうである」と回答した相手は実母（21.0％）が最も多く、次いで義母（13.1％）、夫（10.5％）の順であった。

６．助産師によるケア

助産師によるケアの中で、母乳群と混合群で有意差がみられた項目はなかった。妊娠中から１ヶ月健診までに受けたケアは、１日の授乳回数や授乳間隔の目安についての説明（84.2％）が多かった。反対に、ケアを受けなかったと回答した項目は、家族など周囲の人への母乳育児の説明（63.2％）が最も多く、次いで、産後の乳房の変化（36.8％）、母乳が足りている・足りていない時の見分け方（31.6％）であった。

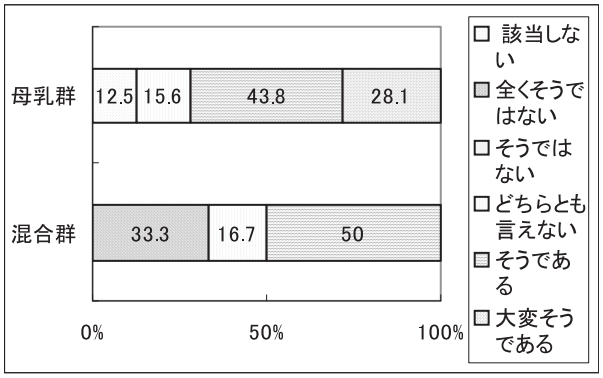

図１　母親の夫に対する相談相手としての評価

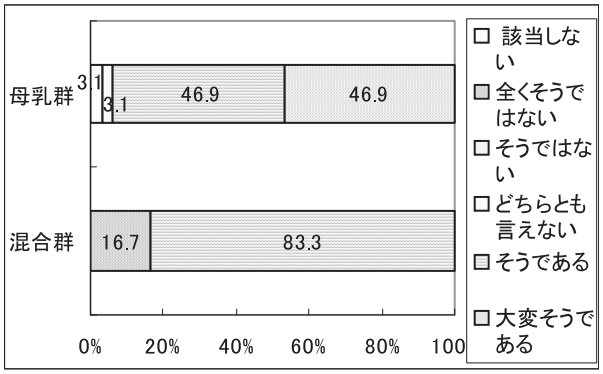

図２　母親の夫に対する手伝いの評価

Ⅳ　考察

今回の調査結果より、約半数の人がミルク追加を考えていたことがわかり、その主な理由は母乳不足感であった。涌谷は「母乳不足感を感じるときは、母乳育児の正確な情報が不足していることが多く、母乳育ちの赤ちゃんの普通に見られる状況をしばしば母乳不足のサインと誤解していることがある」[3] と述べている。今回の調査結果より、約３分の１の母親は母乳が十分か不十分かの見分け方について助産師から説明を受けていないと認識しており、すべての母親へ十分な知識の提供ができていないことが伺える。今後は、母乳を飲めているサイン、児の啼泣理由などを具体的に情報提供することで、児の正常な状況と母乳不足による状況とを見分けることができ、母乳不足感は軽減されると考えられる。

また、母親へのケアの内容に差がある要因として、妊娠期からの母乳育児に関するケアが統一されていないこと、助産師の経験年数や能力によってケア内容に違いがあることが考えられる。今後は、妊娠期から母乳育児に関するより具体的な啓蒙活動を行い、知識やイメージを

獲得することで母親の自信へ繋げることができるよう援助していく必要がある。また、スタッフの経験年数に関わらずすべての母親に必要な情報が行き渡るよう支援を統一、徹底していくと共に、助産師のスキルアップを図る必要があると考える。

一方、母乳不足感を抱きながらも母乳栄養を継続できたのは、母親の母乳育児への意欲はもちろんのこと、周囲の人々の母乳育児があったためと考えられる。

退院後、全ての母親は家族や友人、専門職者など周囲の人々からの支援を受けていた。中でも実母は、「相談相手」「手伝い」の項目で割合が最も高く、母乳育児におけるキーパーソンであるといえる。

また、図1、2に示すように、夫は、「相談相手」、「手伝い」の項目で母乳群、混合群での有意差がみられている。阿部は、「夫からの支援に対し母親が満足であると感じられる場合に育児不安が低い傾向が認められた」[6]と述べており、母乳不足感や育児などで不安を感じている時に、何でも話すことができる夫が育児の手伝いや精神的サポートなど母親を支援していくことで、育児不安が軽減し、母乳育児継続にもつながるのではないかと考えられる。

三田らは「母乳育児継続には、実母と娘の母乳育児意識･知識が一致していることが重要である」[5]と述べているように、主な母乳育児支援者と母親が同じ母乳育児の知識・意識を持つことができるよう、妊娠中から産後の入院中までに退院後の母乳育児支援者となる人への母乳育児支援にも力をいれ、母乳育児を継続できるようサポートしていく必要があると考えられる。

V　結論

1．母乳不足感は完全母乳育児を継続できない一要因である。

2．母乳育児において、特に実母・夫は重要な支援者である。母親同様、妊娠期から母乳不足感を含めた授乳・育児ケアや啓蒙活動を行なう必要がある。

Ⅵ　おわりに

今回の調査結果から、今後のケアのあり方、母親にとって重要な母乳育児支援者は実母・夫であることが明らかになった。今後は、母親と同様に、実母・夫への母乳育児支援にも力をいれ、母乳育児を継続できるようサポートしていきたい。

【引用文献】

1）河合幸子、森路恵：当院における、産後1ヶ月までの母乳栄養継続を妨げる要因に関する考察、第35回日本看護学会論文集（母性看護）、p11、2004

2）小山ゆかり、佐藤絵美：産後一ヶ月間の授乳の体験、第38回日本看護学会論文集（母性看護）、p40、2007

3）涌谷桐子：ペリネイタルケア2009夏季増刊　母乳育児支援ブック、p163、メディカ出版、2009

4）涌谷桐子：同掲書、p163

5）三田奈津子、佐藤知恵、坂本薫他：母乳育児にむけて－実母への介入についての検討－、第39回日本看護学会論文集（母性看護）、p11、2008

6）阿部範子：母親の育児不安と夫の育児支援との関係、第37回日本看護学会論文集（母性看護）、p138、2006

【参考文献】

1）水野克己、水野紀子、瀬尾智子：よくわかる母乳育児、p118-120、へるす出版、2005

2）櫛田恵津子、江幡芳枝：退院後の母乳育児継続に影響を与える要因、日本助産師学会誌21巻3号、p177、2008

3）橋本武夫：母乳育児アンサーブック、ペリネイタルケア2004夏季増刊、p200-201、メディカ出版、2004